



学思

「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し。」——『論語・為政篇』

Newsletter No.77

2024年1月～3月

JSPS Beijing

目次

- センター長のコラム..... 2
- 活動報告..... 3
 - ・ 大連理工大学における JSPS 事業説明会を開催
- 活動記録 (2024年1月～3月)..... 3
- 帰任の挨拶..... 4
 - 国際協力員 小原和樹
- 着任の挨拶..... 4
 - 国際協力員 杉浦南美
- 編集後記..... 5

編集・発行

日本学術振興会北京研究連絡センター

石井紫郎先生と最後の学術月報

前回のコラムで創立 20 周年を迎えた学術システム研究センターを紹介しましたが、その 20 周年記念誌には、何人もの寄稿者が 2023 年 1 月に他界された石井紫郎先生の思い出を記しています。石井先生は、日本法制史の権威で、東京大学副学長や総合科学技術会議の議員等の要職を歴任されてきました。2003 年に学術システム研究センターが創設された際に副所長に就任されており、そのご縁で私も石井先生の警咳に接することができました。

副所長時代に石井先生が携わったことの一つに『学術月報』の最終号の編集があります。『学術月報』は、学術研究の動向などの情報を提供するため JSPS が 1950 年から刊行していたもので、戦前に文部省が年 1 回刊行していた『科学研究費による研究報告』をその源流としています。私のような古参の JSPS 職員にとっては非常になじみの深い月刊誌ですが、既に休刊となってから 16 年が経ち、その存在を知らない人も増えてきました。

2008 年 3 月号が最終号となったのですが、石井先生はその編集長を引き受けられ、巻頭言のなかで、『学術月報』の休刊を「学術」と大学をとりまく環境の劣化を象徴する出来事であり断腸の思いを禁じえないとしつつ、「学術基本法」の制定を訴えられたのでした。そして、巻頭言に「学術基本法」の私案を提示することをもって、『学術月報』の白鳥の歌とされています。

既に 1995 年に「科学技術基本法」が制定されておりますが、この法律でいう「科学技術」には「人文科学」のみに係るものは対象から除くとされておりました。「人文科学」は法律用語としては社会科学も含まれていることから、文科系の学問のみに係る研究は振興の対象から除外されることになり、石井先生は、このことをとらえて「我が国には学問の振興に関する基本法が存在しない」ことを憂慮されていたのでした。

改めて石井先生の私案を読み直してみると、憲法 23 条にある学問の自由に言及していたり、施策の策定に日本学術会議や科学技術・学術審議会を関与させたりしており、今日の大学のあるべき姿や学問をめぐる議論を目的につけ、石井先生がいかに根本的な問題提起をされていたかということに気づかされます。

その後「学術基本法」の制定は実現されないまま今日まで来ておりますが、一方で「科学技術基本法」は 2020 年に改正され、人文科学のみに係る科学技術を除外するという規定は削除されました。名称も「科学技術・イノベーション基本法」と変更されています。

「科学技術基本法」が改正された時、脳裡に浮かんだのは石井先生のお顔と『学術月報』の最後の巻頭言でした。改正により「科学技術の振興は・・・学術的価値の創出に寄与するという意義・・・を持つことに留意する」といった文言が加わったりしており、巻頭言に込められた石井先生の思いが反映されていると言えるのかもしれません。ただ、はたして石井先生はこれでよしとされていたのかどうか、今となっては直接お話を伺う機会は永遠になくなってしまいました。

センター長 山口英幸

大連理工大学におけるJSPS事業説明会を開催

2024年3月18日（月）、大連理工大学にてJSPSが実施する国際交流事業の説明会を実施しました。本説明会では、同大学の化工学院の副院長・劉毅教授が司会を務め、経済管理学院、建築・芸術学院、エネルギー・動力学院等、研究科の垣根を超え、40名余りの研究者・学生が参加しました。

説明会の冒頭には、国際合作与交流処長・王珏氏、化工学院院长・劉涛教授、当センター・山口英幸センター長が挨拶を述べ、これまで築いてきた大連理工大



会場の様子

学とJSPSの深い関係を改めて振り返りました。現在、大連理工大学には20名を超えるJSPS中国同窓会員が所属しており、各研究科で活躍しています。

国際交流事業を紹介するセッションでは、当センター・金子めぐみ副センター長が、外国人特別研究員、国際共同研究事業、二国間交流事業等の各種プログラムについて、説明を行いました。また、JSPS中国同窓会副会長兼東北支部会

長・蘇媛教授、JSPS中国同窓会員・賓月珍教授が、プログラムの申請に関するアドバイスや訪日時の研究活動の様子について、自身の経験をもとに報告を行い、参加者との交流を実施しました。説明会終了後には、精细化工国家重点実験室の見学も行われました。

参考：大連理工大学化工学院 HP

<https://chemeng.dlut.edu.cn/info/1007/15603.htm>



劉毅副院長による司会進行

センターの活動記録

(2024年1月~3月)

1月

- 9日 留日学人活動站総会参加
- 11日 Bridge 事業審査会開催
- 12日 在中国日本大使館新年賀詞交換会参加
- 15日 中央民族大学同窓会員来訪
- 16日 広報文化十一者会出席
- 17日 名古屋工業大学藤教授来訪
- 18日 中央民族大学国際教育学院見学
北京日本倶楽部文化講演会参加
- 22日 中国日本商会工業部会第1分科会定例会出席

2月

- 23日 上海交通大学との意見交換会（オンライン）
- 25日 上智大学との日中交流に関するインタビュー（オンライン）
- 27日~28日 アジア大学フォーラム参加
- 2日 金杉大使表敬訪問
- 19日 広報文化十一者会出席
- 28日 インド大使との交流会参加
- 29日 中国日本商会工業部会第1分科会全体会議出席

3月

- 16日 伊藤比呂美北京講演会参加
- 18日 大連理工大学におけるJSPS事業説明会開催
- 19日 天皇誕生日祝賀レセプション参加
- 21日 北京日本倶楽部文化講演会参加
- 22日 中国教育部訪問
- 25日 広報文化十一者会出席
- 28日 中国日本商会工業部会第1分科会定例会出席
- 29日 中央民族大学訪問



10月29日の北京マラソンにて

2024年3月末を持って本職を離任し、帰国することとなりました。1年という短い期間でしたが、公私ともにたくさんの方々と知り合い、交流し、充実した北京ライフを送ることができました。この場を借りて、お世話になったみなさまに、改めて心より感謝申し上げます。

2023年度は、「コロナ禍」を経て、センターとしての活動を以前の水準に戻すことを意識しつつ、新たな取組に挑戦していく1年でした。同窓会関連のイベントやシンポジウム、希平会等、数年ぶりに対面・ハイブリッドで実施した活動も多く、現地の大学や学術機関の関係者の方々から直接お話を聞く機会に恵まれ、初めての海外駐在として、貴重な経験を積むことができました。

中国に来る前は、漠然と潤沢な研究「資金」がこの国の科学技術の発展を支えている源泉であると考えていましたが、実際に現地で様々な中国人研究者の方からお話を伺う中で、「競争」の原理も非常に強く作用しているなど実感させられる場面が多かったように思います。大学入試はもちろんのこと、

研究者のキャリアにおいても熾烈な競争が展開されており、そうした状況が優れた研究成果として結実することもあるれば、「ハゲタカジャーナル」等、過度な競争がもたらす歪が立ち現れてきています。こうした状況に対し、適切な「競争」を促していくための方策として中国の学術機関・学術機構が研究評価の在り方を積極的に検討しているというのは、現地ですら実際にお話を聞くことを通して得られた大きな気づきの1つであると感じています。日本においても、研究評価の在り方は絶えず議論されているテーマですので、引き続き、中国における議論・政策の動向を注視していきたいと考えています。

プライベートでは、中国国内の様々な地域で計12回、マラソン・ランニングの大会に参加しました。それぞれの大会を通じて、各地の人や物、文化に触れ、通常の旅行とは一味違ったかたちで中国を満喫することができました。また、北京では母校や所属大学の校友会にも参加し、多種多様な職種の方々と交流できたことは、とても大きな学びとなりました。

4月からは、北京での生活を通じて得られたつながりを大切にしつつ、東京大学に戻り、業務に邁進したいと思います。みなさまが東京にいらっしゃる際にはぜひお声がけください！引き続きよろしくお願いたします。

国際協力員 小原和樹

着任の挨拶



4月1日よりJSPS北京研究連絡センターに国際協力員として着任しました、九州大学の杉浦南美(すぎうら みなみ)と申します。昨年度東京本部では、JSPSのような資金提供機関(FA)が参加する国際会議等に関する業務に携わっておりました。

私自身と中国との関わりは、中国の音楽やドラマを聞いたり見たりする程度(実はこれを話すだけでも長くなります)ですが、九州大学の職員としては、直接関わる立場にいないにもかかわらず中国人留学生や研究者の存在感や勢いを日々実感しておりました。その一方で、日本にいても彼らの出身国である中国の大学や学術研究の現状を知ることがなかなか難しいなと感じていたところ、この度JSPSの国際学術交流研修に参加する貴重な機会を頂き、東京本部での勤務を経て北京研究連絡センターに参りました。

東京本部における様々な業務を通じて、日本と中国は学生や学術交流の面で深く長い繋がりがあることを知る機会に恵まれましたが、実際にこの中国の地で、中国の大学や学術研究の現状を更に深く学ぶと同時に、私自身少しでも日中の大学交流・学術交流に貢献することができればと考えております。

個人的には、日本からはなかなか見えない中国に住む人々の社会や生活にも興味があり、早速買い物アプリやSNSアプリの利用にもチャレンジしています。便利さと難しさの狭間に揺れる毎日ですが…。

最後になりますが、少しでも自分の中での「中国」という国の解像度を上げるというのがこの1年間での私の目標です。仕事と語学勉強の両立にも頑張りつつ、頂いた貴重な機会を有意義に過ごせるよう努めていく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

国際協力員 杉浦南美

編集後記

年明けすぐに、留日学人年会に参加させていただく機会がありました。普段仕事関係でお会いする日本留学経験者は博士課程以降に留学した方が多く、学部生時代等比較的若い頃に日本に留学した方々の赤裸々な経験談を伺うことができたのはとても新鮮でした。学生時代に日本留学し、日本の居酒屋でのバイト経験がある方が仰っていた、「日本での経験は何にも代えがたいものだが、日本は必ずしも全てが良い国なわけではない」という言葉は、まさに真の国際理解をした結果なのかなと、深く考えさせられるところがありました。

また、3月後半には大連理工大学へ赴き事業説明会を開催しました。大連のイメージは海が近くて綺麗な都市、という漠然としたものでしたが、大連理工大学に多くの日本語が堪能な日本留学経験者がいることに驚きました。最近では日本へ留学といっても英語でコミュニケーションを取ることが多く、必ずしも日本語が堪能になって中国に戻ってくるわけではないようです。日本の大学の国際化が進んだという素晴らしい一面ではあるものの、語学は文化の一つであるため、日本語を解する中国人が今後は減ってってしまうのかなという一抹の寂しさは拭えません。

私自身、まだまだ中国語を勉強中の身ですが、中国語を通して中国文化を知り、歴史ある中国への理解を少しずつ深めていきたいというのが、新年度の抱負です。

副センター長 金子めぐみ

日本学術振興会 北京研究連絡センター

JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE BEIJING REPRESENTATIVE OFFICE

北京市海淀区西三環北路 89 号 中国外文大廈 A 座 404 室

郵便番号:100089

Tel: + 86-10-8882-4331

Fax: +86-10-8882-4332

E-mail: beijing@jsps.org.cn

URL: www.jsps.org.cn



WeChat